『海』第二十八号の作品について

『海』のホームページには、「ニュース」のコラムを設け、『海』の作品に対していただいた批評や感想などの内容の要旨を掲載し、同人個々の参考になるようにしています。

第二十八号（通巻第九十五号）の作品に対しお寄せいただいた感想などの一部（抄）を、左記に掲載させていただきます。

ご意見をいただいた各位（お名前は略）に、心から感謝申し上げます。

◇エッセイの部

上水敬由「砂ぼこり」

・浅川マキの歌はいい曲。共感する。

◇詩の部

群　青「朝日のなかで」

・自分と自分自身、そして自分と言葉との、「角突き合わせた交響詩」のようだ。

・たくさんの登場人物が鮮やかに描かれており、読み手も、ともにその世界を覗いているような気にさせられる。

牧草　泉「愛しの『ユーチューブ』ほか」

・リチャード・クレイダーマンの曲を思い出しながら、共感できた。

◇俳句の部

松本西夏「払暁」

・しっとりと、しかも枯れた点がいい。

◇小詩論の部

井本元義「アルチュール・ランボー小論」

・物語性に富み、ランボーの精神と実生活に否応なく誘う。

・文学的詩精神の真髄を知るための、優れた教材になろう。

◇小説の部

高岡啓次郎「幻聴」

・安定した筆遣いで読ませる。

・弁護士が心身に不調をきたすも、娘の支えもあって回復するまでの話が、細かい心理描写でよく描かれている。

・ラストの心象風景も、回復のイメージとして分かりやすい。

有森信二「灘」

・自然描写から物語に入る手法がよい。

・躍動感あるリアルな表現がよい。

・感情移入させる巧みさがある。

牧草　泉「ある恋愛の顛末」

・スタンダールやバルザック的な描写論を越えて、評論を交えているのが現代的。

・結婚の破綻の原因が、彼女の鼻の整形だったというストーリーの工夫がよい。

・音楽鑑賞と女性の性格を結び付け、面白く読ませる。

中村太郎「幼年期―郷原直太の場合・其の壱　じっけん（前篇）」

・文体に勢いがある。

井本元義「虚空山病院」

・精神病院の院長をめぐる女性との愛の関係を、濃密に語る。

・構成もゆるぎなく、陰鬱さの中に人間のロマン性を描いた力作である。

・三つの告白を紡いで、院長を浮き彫りに仕上げた手法はみごとである。

・安楽死、老人医療、先端医療、モラルなど、今日的な問題にも意欲的に取り組む。

・一編の交響曲シンフォニーを感じさせる。

◇『海』全体の部

・実体験をベースにした「告発体」が、『海』の特色であろうか。

・この号も読み応えのある作品が多く、充実している。

・活力と持続力がすばらしい。

（まとめ・U）